# 佛教におけるSaddhā（信）の概念

H・サッダーティッサ
柏原信行訳

## 一

佛教においては、信（confidence）の概念はパーリ語のsaddhāサンスクリット語のśraddhāに属するものである。saddhāは通常翻訳されるような信仰（faith）ではなく、[1]確信（conviction）に裏づけられた信（confidence）である。

佛教哲学では信は善心（浄化的精神）の要素であり、単なる信よりも深遠な哲学的意味を持っている。まず第一に四聖諦の理解と確信に裏づけられた信であり、第二には信者が佛陀の人格と教義大系に対して持つ崇敬と尊重の念であり、第三には実行に対する真剣な意志を意味し、人間の生来の道徳性のうちの倫理的要素を実現する。

四世紀の有名な佛教哲学者の無著はsaddhāについて次の三つの局面を掲げている。即ち㈠事物は存在するという十分で堅固な確信、㈡穏やかな楽しみと良い素質、㈢目的とするものを成し遂げる熱意と意志、である。[2]いずれにせよ、信は佛陀の教えに対する熱烈な信者とはあまり関係がない。

佛教は、事物をありのままの見方で見ること（dassana）を強調するのであって、人間を盲目的にしてしまう自己存続の為の利己的な信仰や、欲望を強調するのではない。明確に見れば、いわゆる我（atman）は存在しないし、また存

在し得ない。精神の向上の限りない成就を得ようと思う者には、dharma に対する信を持つことが大変重要である。なぜなら、そのような発展は主に信に基づくからである。精神の発展は信に基づくから、信を欠く者は徳性と精神統一の修行から必ず脱落する。

信は、聖なる (ariya) 七財[3]の第一、信財 (saddhādhana) である。また、精神的力 (bala 五力) の第一であり、心の倫理的能力 (indriya 五根) の第一である。信は、努力 (勤) と注意 (念) と集中 (定) と正しい知力 (慧) の本質的精神的特性を生み出す大きな磁気的な力を持っている。そして又、感覚的欲求 (kāmacchanda 貪欲)、悪意 (vyāpāda 瞋恚)、心と精神要素の頑冥 (thīna-middha 惛沈・睡眠)、落ちつきの無さと不安 (uddhacca-kukkucca 掉挙・悪作)、確信のないこと (vicikicchā 疑[4]) を除去する。

信は、心の輝きと明るさを保持するのである。

## 二

法に対する信は、道徳上健全なものに対する一時的な確信から発するが、次第に完全者(佛)と佛の教え(法)と佛の率いる高潔な教団(僧)に対する不動の信頼 (trust) の形へと発展する。

佛陀は盲目的な信仰を排し、盲目的信仰を持てばどのような自己浄化をなしても信者は救われない、ということを指摘した。佛陀は常に、教えを理解した後に於いてのみ、その教えを信ずべきであることを強調した。そして、時々、知識に基づいた信仰を持つ者を誉めた。この信を佛教術語では、saddhā と呼ぶのである。

信が基づくところの理解は、時によって強い場合も弱い場合もある。佛陀は saddhā を、患者が医者に或いは生徒が先生に対して持つ信にたとえた。患者は、医者の治療と助言から受ける利益が大きいほど、医者に対して、より大きな saddhā を持つ。同様に、学生は、受ける授業がわかり易く、試験にうまく合格できれば、先生に大きな信を持

つ。もし、医者の処方が患者の病に効果がなければ、患者は saddhā を失ってゆくであろう。

佛陀は、佛陀自身の教えの中で、次のように説いている。

「賢者が金を熱したり切ったりして試金石で試すように、汝ら比丘たちも、私の言葉を実践によって試すべきであり、私に対する尊敬の為に、安易に真受けすべきではない。[5]」

佛教徒の佛陀に対する信は、ちょうど、良い医師や先生に対して持つところのもののようなものである。佛教徒は、信を抱くに足るだけの確固たる下地を持っている。佛陀の教えが、人々に提示したものは、まず第一に知的に信じられるものである。なぜなら、それはこの世界の自然の法則と同様、可視的であって経験によって証明可能なものと一致するからである。

人々は、佛陀の示す方法が自分達のみじめな状況に終わりを告げることに効果的であることを知った。遂に人々は、佛陀の教えによって、自ら「来たれ、見よ（ehi-passiko）[6]」へと導かれた。佛陀は人々に、直接的経験によって、佛陀の教えに納得するに足る明らかな証拠が得られるまで――それは、最初の（禅 jhāna の）達成と同時に得られるのであり、その後は普通の疑いは生じない[7]――自分の疑いをそのままに保留することのみを求めたのである。

## 三

佛陀の教説では、至高の力とは、自然の因果の法則であり、そこから kamma（業）即ち意志作用（cetanā 思）とその結果（vipāka 異熟）の道徳的秩序が生ずる。佛陀の倫理的な教えは、本質的に人間の究極の目的の一部である。即ちそれは saṃsāra（輪廻）と呼ばれるところの繰り返される誕生の苦しみからの解放を得ることである。

佛陀は、医者が患者に治療の注告をするように、自分は正しく方法を指摘するだけである、と言った。即ち

「努力し実践することは、汝らに関することである。如来たちは、ただ方法を指摘するだけである。[8]」と。

佛陀は師(satthā)として敬われている。佛陀は真理を悟ったあと、それを世間に説いた。佛教は、啓示(revalation)ではなく、佛陀自身が努力によって明らかにした救い(deliverance)である。佛陀は慈悲の心からその真理を人々に説いた。そして、その真理の正当性を、人々に自らの判断力と知力と経験の明かりのもとで検討するように求めた。

佛陀は弟子達に、三聖典(Tipitaka 三蔵)即ち口伝の権威に対して盲信を抱くことを、最も厳しくいましめた。このことは、質問自由の宣言であるところの Kālāma Sutta と呼ばれる正式の教説の中に明らかにされている。佛陀はその中で言う。

「これ、カーラーマよ。伝説に従うなかれ、風説に従うなかれ。経典との一致に従うなかれ、憶測に従うなかれ、推論に従うなかれ、単なる推理(logic)に従うなかれ、偏見に従うなかれ、人のうわべの能力に従うなかれ、この苦行者が我々の師であるという考えに従うなかれ。しかし、汝らが自ら(観察と経験と正しい判断とによって)『このようなものは悪である。そして、このようなものを採り信奉すれば、害と悪とに導かれる。』とわかる時には、そのようなものを受容し信奉すべきではない。カーラーマよ、汝らが自ら『このようなものは善である。これらのものには欠点がない。これらのものは賢者にたたえられる。これらのものを採り、成すならば、幸福と安楽に導かれる。』ということを知れば、その時には、汝らはそれ相当に行動して暮らすのである。[9]」

佛陀は、決して弟子たちに佛陀と佛陀の教えに対する盲目的服従的な信仰を説こうとはしなかった。佛陀は理知的な質問ができるように説いた。

カーラーマの質問に応えて、佛陀は次のように説いた。

「カーラーマよ、疑うこと、確定せぬことが、汝らには適切なことである。疑わしいことについての不確定が、汝らに生じたのである。[10]」

佛陀は、我々が理由もなしに真理と一致しないものを受け入れることは望まなかった。佛陀は、物事を真にあるがままに（*yathābhūta*）、理解するよう我々に求めたのである。

ある時、ニガンタ・ナータプッタ（Nigaṇṭha Nātaputta　即ちジャイナ教の教祖マハーヴィーラ Mahāvīra）の熱烈な信者の、ウパーリ（Upāli）という長者が佛陀の所へ行き、よく考えながら佛陀の教えを聞いた。そして、ウパーリには saddhā が生じ、すぐに佛陀の弟子になりたいという考えを述べた。

しかし佛陀は、

「ウパーリよ、本当に十分によく研究してみよ。」

と言ったのである。

そこで、ウパーリは大いに歓喜して言った。

「もし、私が他の教えの信者になることを承諾したとすれば、他の教えの者たちは、行列を作って私を市中に連れてまわり、『これこれの長者が我々の信仰を受け入れたぞ』と言いふらすでしょう。

ところが、世尊よ、世尊は私に更に一層研究をなすように勧められました。私は世尊のこの御言葉によってより一層喜びを感じました。」

そして、ウパーリは佛・法・僧に救済を求めたのである。[11]

佛陀によれば、人は師を盲目的に信ずべきではなく、また、師が、個人的な救済や、清らかさや、穏やかな人がらを一見するだけで、自分を救ってくれるだろうと期待して、救済を求めるべきではない、とされる。

人は、師自身の精神的浄化によって自分も浄化される、と考えるべきではないのである。

ヴェーダに通じていたバラモンで、僧になったヴッカリ（Vakkali）という者があった。

ヴッカリは、倦むことなくたえずちらちらと佛陀を見て、自分の時間を、全て佛陀のまわりにつきまとって過ごしていた。

佛陀は、

「これ、ヴッカリよ、私の汚れた肉体を見たところで、何になろうか。dhamma（法）を見る者が、我を見るのである」

と言ったのである。[12]

## 四

初期佛教の経典は、パーリ聖典の中に収められている。これは、佛陀の入滅の後、Ajāta sattu（阿闍世）王の庇護の下に、北インドの Rājagaha（王舎城）で、弟子たちが編集したものである。

その時から経過した二千五百年の間には、何らかの改竄があちこちにあったであろうということは、大いにあり得ることである。しかしながら、この一群の書物は、佛陀の教説に最も近く、最も信用できる資料であろうということは、十分な確信を持って言えることである。

佛教徒は、この書物を読んで、佛陀の教えを理解し、また佛陀によって説かれた道をたどるための示唆を受けるのである。このパーリ聖典は、偉大な師からの佛弟子に対する助言として尊重されている。パーリ聖典は、受容され信ぜられるものではなく、理解され実践されるものなのである。

佛陀は、自分の教義を筏にたとえている。

「これ、比丘らよ、汝らに告げる。教義というものは（存在の流れを）渡るために用いられる筏のようなものであって、手近に置いておくためのものではない。

ある男が広い水域のところへやってきて、安全で危険のない対岸へ渡るところが無いのを知ったとする。彼は、樹と枝と葉と草とそれからなわとで筏を造り、それを使って対岸へ渡ったとしよう。

さて、比丘たちよ、考えてみよ。

この男が、

『この筏はこんなに私の役に立った。だから、私はこの筏を頭に載せて運んで旅を続けよう。』

と考えたとする。この男は、筏を正しく扱ったことになるであろうか。」

比丘たちは、その行為が正しくないことを認めた。そして、佛陀は、はっきりした答を付け加えた。

「比丘たちよ、全くそのとおりである。私が説いた教えは渡るためのものであって、しっかりと保持するためのものではない。[13]」

ただしっかりと保持しているだけでは、信仰が促し意味し含むことを実践する困難さに耐えることなくして、信仰というレッテルを貼ったにすぎないのである。

ある教説の中では、佛陀は、佛陀や佛陀の示した道や道に達した彼の弟子たちについて、決して性急に判断を下さないように、バラモンに警告している。あらゆるものには、程度と段階がある。そして十分な証拠もなしに、何か最高の状態にあるようなものを考えるべきではない。佛陀は、続いてこのことを象のたとえによって説明している。

普通の者は、森の中で大きくて長い足跡を見ると、「まさに、これは巨大な王象の足跡だ。」という結論に達する。しかし、象狩りに熟達した者は、「これは必ずしも王象の足跡とは限らない。小さなメス象でも、こんなに大きな足跡をつけるのがいる。」と言うであろう。彼は更に象の足跡を追い、象の肩が森の樹の高い所にぶつかったり、高

いところのものをこすっているのを確認する。この時でも、他にも王象と同じようなあとをのこす象がいるので、彼はその足跡が王象のものであるとは断定しない。自分自身の眼で見た時に、はじめて巨大な王象であると断定するのである。

ちょうど同様に、人は、自己の内の発展の様々な段階を経ねばならない。そして、それぞれの段階を、最も完全な段階であると考えるべきではなく、最終的に真理を体得できるまで、屈してはならないのである。[14]

佛陀は、

「信は人を資ける。まことに、知力は正しく人を支配する。[15]」

と言っている。

弟子たちが佛陀に救済を求めたとしても、佛陀が弟子たちの為に応えるであろうという個人的な保証はない。

佛陀は言う。

「悪は必ず独りでなされ、人は独りで清浄となる。[16]」

また、佛陀は、目標について言明している。

「(それは各々が)自ら正しく理解し、経験した後に(達せられる)[17]」と。

## 五

業思想によれば、未来の幸福は、現在の行為を、満足のいくレベルに維持したことの直接の結果、あるいはその継続である。過去の行為は、必ず現在と未来とにその影響を及ぼす。人は、善にしろ不善にしろ行為の果を受ける。そして、他の者の道徳的な長所をもってしても、果を避けることはできない。なし得る最高の手だては、悪しき行為を断ち去り、善い行ないを増やすことである。そうすれば意志が解放され、いずれを選択すべきかを判断するための、

洞察力と識別力が必ず錬磨されるであろう。

佛陀は、識別力を錬磨することを強調した。それは、盲信は人の励ましとならないからであり、また人が悪の道に追従するのを誡めることになるからである。Dhammapada（法句経）から、我々は次のことばを得る。

「もし、比較的小さな安楽を棄て去ることによって、比較的大きな安楽が得られるならば、賢者はより大きな安楽のために、小さな安楽は棄て去るべきである。[18]」

それ故、考え得る限り比較して識別するように意志し、その比較を引き出せることが必要である。

しかしながら、諸々の佛教国では佛教に関する信心や荘厳について、このようなことが明確にはされていない。佛教の信心や荘厳に関与する人は心の姿勢を明瞭にすべきである。荘厳の儀式の中心となる実体的なものは Buddha-rūpa[19]（佛像）にある。このような概念は、紀元前一世紀迄の佛教儀式には知られていない。初期の儀式は菩提樹、法輪、蓮華、足跡によって行なわれ、佛あるいは佛教の特定の概念を表わしていた。佛陀を人間の姿で表現したのは、インド以外、とりわけおそらくはギリシァからの影響であると、一般には解されている。

佛教徒が、それらの像の前に行き香や華を捧げる時には、その像に対して帰依をしているのではない。それは、報謝の表現であり、信者は、しおれてゆく華を見て黙想する。

種々の華によって、我は佛陀に敬意を表す。
そして願わくは、この功徳によって解脱があらんことを。
まさに、この華がしおれるように、
そのように、我が身体は滅に近づく。[20]

普通の者は、像を、注意力を集中するのに役立てるが、智者は像なしですますことができ、注意力のかわりに思考

を集中することができる。佛陀に対する真の敬意は、どの程度まで佛陀の教えに従うかということによってのみ測られるべきである。この態度は、佛教徒の道徳的な観点にどのように影響するであろうか。

神或いは神々が地位を向上させてやろうと思うまでは、人間は神或いは神々の下に永久に追従する創造物である、という有神論の宗教とは対照的に、佛教徒は、努力しようとする高さまで自らを高揚させることができる。佛教徒の精神力は決して隷属させられない。この力は、理解から生ずる信の利点であって、決して盲信ではない。佛教徒の巡礼者は成就の見込を持って出発する。彼は決して哀れな罪びとではなく、示唆を得る為に聖地を訪れるのである。

佛教徒は、寺に着けば何をするであろうか。寺院の中で、示唆の徴となる佛像を見出だす。佛教徒は、その佛像が佛陀の教えに精神を集中するのに有用であることを知る。彼は又、寺院の中で供物を成す。香や華をささげるのは、彼の恭敬と報謝を表すものであって、真の意義を示すものではない。佛教徒の供養は、佛陀の卓抜した能力を認めることなのである。そしてそれは、佛陀と法とを自分の指導者とすることの、外面的表現である。佛教徒は、人生の道程を佛陀によって敷かれたものとして受け取っているのである。

殆んど全ての宗教は、信仰(faith)の語で信(confidence)を説いている。しかるに佛陀は、信者たちに、自ら見て理解する様に勧めたのである。

**註①** saddhā についての英訳語は、Pāli-English Dictionary, by T. W. Rhys Davids & W. Stede; A Dictionary of Pāli Language, by R. C. Childers; Buddhist Psychology, by C. A. F. Rhys Davids; Compendium of Philosophy, by S. Z. Aung. などでは全て faith とされている。Concise Pāli-English Dictionary, by A. P. Buddhadatta では faith の他に devotion があげられ、The Psychological Attitude of Early Buddhist Philosophy, by L. A. Govinda では faith の他に confidence もあげられている。また、A Manual of Abhidhamma, by Nārada では confidence と訳されている。梵語

śraddhā については、Sanskrit-English Dictionary, by M. Monier では faith, trust, confidence などが挙げられ、The Practical Sanskrit English Dictionary, by V. S. Apte には trust, faith, belief, confidence などが挙げられている。（訳者註）

② *Abhidharmasamuccaya*, Pradhan's ed., *p. 6*: śraddhā katamā, astitvaguṇavattvaśaktatveśv*abhisaṃpratyayaḥ prasādo' bhilāṣaḥ, cchanda*sanniśrayadānakarmikā. (*Gokhale's ed. p. 16 °śakyatveṣu°, chanda°)

cf. Abhidarmasamuccaya-Bhāṣyam p. 5: astive'bhisampratyayākārā śraddhā; guṇatve prasādākārā; śakyatve'bhilāṣākārā, śakyaṃ mayā prāptuṃ niṣpādayituṃ veti.

③ ここで言う七財 (satta dhanāni) とは、七聖財 (satta ariya-dhanāni) であり、信・戒・慚・愧・聞・施・慧の七つの聖法である。（訳者註）

④ これらの五つは、五蓋の内容である。cf. Atthasālinī p. 119, Milindapañhā p. 34: saddhā uppajjamānā nīvaraṇe vikkhaṃbheti（訳者註）

⑤ *Jñānasārasamuccaya 31: tāpāc chedāc ca nikaṣāt/suvarṇam iva paṇḍitaiḥ/parīkṣyam bhikṣavo grāhyam madvaco na tu gauravāt.*

Jñānasārasamuccaya とは、北京版西蔵大蔵経 No. 5251 の Ye-śes sñiṅ-po kun-las btus-pa shes-bya-ba（智心随集）である。著作は三世紀頃の Āryadeva に帰せられているが、実際には、内容的には後期のものとされている。前掲の梵文は、下記の文の還元梵文と思われる。

(31) bsregs bcad bdar-baḥi gser bṣin-du / dge-sloṅ-dag gam mkhas-rnams-kyis / yoṅs-su brtags-la ṅa-yi bkaḥ / bloṅ-bar bya-yi gus-phyir min // （訳者註）

⑥ 来たりて見るべきものという意味で、佛陀の教法を指す。cf. Vism. p. 216.（訳者注）

⑦ 不善心所の一である疑 (vicikicchā) は、見所断であり預流向に入れば断ぜられる。（訳者註）

⑧ *Dhammapada v. 276*: tumhehi kicccaṃ ātappaṃ, akkhātāro tathāgatā,

⑨ *Aṅguttaranikāya* I (*Pali Text Society; London, 1961. reprint*), *p. 189 f*: ettha tumhe kālāmā mā anussavena mā paramparāya mā itikirāya mā piṭakasampadānena mā takkahetu mā nayahetu mā ākāraparivitakkena mā diṭṭhi-

nijjhānakkhantiyā mā bhavyarūpatāya mā samaṇo no garū ti, yadā tumhe kālāmā attanā va jāneyyātha——ime dhammā akusalā ime dhammā sāvajjā ime dhammā viññugarahitā ime dhammā samattā samādinnā ahitāya dukkhāya saṃvattantī ti atha tumhe kālāmā pajaheyyātha. .....yadā tumhe kālāmā attanā va janneyyātha——ime dhammā kusalā ime dhammā anavajjā ime dhammā viññuppasatthā ime dhammā samatthā samādinnā hitāya sukhāya saṃvattantīti atha tumhe kālāmā upasampajja vihareyyātha.

(10) *ibid., p. 189*: alaṃ hi vo kālāmā kaṅkhituṃ alaṃ vicikicchituṃ. kaṅkhaniye va pana vo ṭhāne vicikicchicchā uppannā.

(11) *Majjhimanikāya* I (PTS; London, 1964 reprint), p. 371 f. Upālisutta p. 378 f: ".....esāhaṃ bhante bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāmi, dhammañ ca bhikkhusaṅgañ ca. upāsakaṃ maṃ bhagavā dhāretu ajjatagge pāṇupetaṃ saraṇagatan" ti. "anuviccakāraṃ kho gahapati karohi, anuviccakāro tumhādisānaṃ ñātamanussānaṃ sādhu hotī" ti. "iminā pa'haṃ bhante bhagavato bhiyyosomattāya attamāno abhiraddho yaṃ maṃ bhagavā evaṃ āha 'anuviccakāraṃ kho gahapati karoti, anuviccakāro tumhādisānaṃ ñātamanussānaṁ sādhu hotī' ti. maṃ hi bhante aññatitthiyā sāvakaṃ labhitvā kevalakappaṃ nāḷandaṃ paṭākaṃ parihareyyuṃ 'upāl'amhākaṃ gahapati sāvakattūpagato' ti. atha ca pana maṃ bhagavā evaṃ āha 'anuviccakāraṃ kho gahapati karohi, anuviccakāro tumhādisānaṃ ñātamanussānaṃ sādhu hotī' ti. esāhaṃ bhante dutiyam pi bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāmi dhammañ ca bhikkhusaṅgañ ca. upāsakaṃ maṃ bhagavā dhāretu ajjatagge pāṇupetuṃ saraṇagatan" ti.

(12) *Saṃyuttanikāya* III, Vakkalisutta, *p. 120*: alaṃ vakkali kiṃ te iminā pūtikāyena diṭṭhena. yo kho vakkali dhammaṃ passati so maṃ passati, yo maṃ passati so dhammaṃ passati. dhammaṃ hi vakkali passanto maṃ passati, maṃ passanto dhammaṃ passati. cf. *Itivuttaka*, p. 90 f.

(13) *Majjhimanikāya* I, Kullūpamaṃ dhammadesanā p. 134 f.: "kullūpamaṃ vo bhikkhave dhammaṃ desissāmi nittharaṇatthāya, no gahaṇatthāya, .....seyyathāpi bhikkhave puriso addhānamaggapaṭipanno. .....evameva kho bhikkhave kullūpamo mayā dhammo desito nittharaṇatthāya, no gahaṇatthāya. kullūpamaṃ vo bhikkhave ājānantehi dhammā pi vo pahātabbā pageva adhammā.

⑭ *Ibid.* I, pp. 178～84, Cullahatthipadopama Sutta. 内容略。

⑮ Saṃyuttanikāya I, 38. saddhā dutiyā purisassa hoti, paññā cenaṃ pasāsati.

⑯ Dhammapada v. 165: Attanā va kataṃ pāpam attanā saṃkilissati,

⑰ 随所に見られる。

⑱ Dhammapada v. 290: Mattāsukhaparicchāgā passe ce vipulaṃ sukhaṃ, caje mattāsukhaṃ dhīro sampassaṃ vipulaṃ sukhaṃ.

⑲ cf. Vism. p. 228. (訳者註)

⑳ この偈とこれに類似した偈については、H. Saddhātissa, *Handbook of Buddhists* (Mahābodhi Society of India, Benares, 1956). に掲載されている。

pujemi buddhaṃ kusumena'nena puññena-m-etena ca hotu mokkhaṃ pupphaṃ milāyāti yathā idaṃ me kāyo tathā yāti vināsabhāvaṃ.

サッダーティッサ博士は、スリランカに生まれ、一九二六年に出家した。Vidyodana 僧院で Paṇḍita の試験に合格、パーリ語に熟達した。後に、数年間インドのベナレス・ヒンドゥ大学で、パーリ語と佛教とについて講義をし、その間、サンスクリット語を学んだ。M. A. と Ph. D. の称号を有している。現在は、ロンドンに住み、The London Buddhist Vihāra の管長であり、British Mahā Bodhi Society の主任を務め、また Pāli Text Society の評議員であって、各大学で講義をしている。一九六一年には、Pāli Text Society より、Upāsakajanālaṅkāra (在家佛教者の荘厳) を校訂出版した。その一二〇頁余りに及ぶ序文の中には、綿密詳細な調査研究の成果が著されており、博士の日頃の学究が伺われる。

ここに掲載した論文は、昭和五十三年十月四日、大谷大学佛教学会主催の学術懇談会においてなされた博士の講演の内容である。その際、聴取者に博士のタイプによる英文論文が配布され、講演はそれに基づいてなされた。この時の論文は、The Eastern Buddhist (new series) Vol. XI No. 2 (Oct. 1978. Kyoto) に掲載されている。訳者の翻訳はこれに基づいた。

「信」を表わす語については、saddhā (śraddhā) の他に pasāda (prasāda) や bhatti (bhakti) があり、これらについて

も言及して頂きたかった。

この論文は、佛教での信について書かれたものであるが、とりわけ上座部佛教に関するものである。各国に広がる佛教、特に大乗佛教では、ここに書かれた信とはまた別の概念の信も説かれる。浄土教思想で説かれる信心などは、確信としての信とはまた別のものであろう。

また確信という意味内容を持つ語には、adhimutti（adhimukti 信解・勝解）という語もある。

パーリ論書の Visuddhimagga や Atthasālinī などでは、saddhā について、pasādana を味（rasa）とし、adhimutti を起（paccupaṭṭhāna）とするとされている。パーリ経典からの引用のみならず、パーリ論書からの引用もして頂きたかった。更に欲を言うならば、Abhidharma-samuccaya や Jñānasārasamuccaya 以外にも、北伝佛教からの広範な引用を望みたかった。しかし、我が国でも屢々言われてきた śraddhā＝確信という説が、博士の種々の経典引用によって、より一層明確となったことは事実である。

なお、prasāda や bhakti との比較は、大谷学報第四十九巻第一号（昭和四十四年六月発行）に、佐々木現順博士の論文《「信仰」を意味する諸原語——bhakti, śraddhā, prasāda——》があり、歴史的、地域的な考察がなされているので、それを参照せられたい。（訳者）